

介護福祉実習における記録指導の課題

しば はら きみ え
柴 原 君 江

〈要 旨〉

介護福祉実習において学生がもつ負担感の一つに実習記録がある。実習施設の指導者から問題が指摘されることも多く指導が必要であるが、実習ノートの記載だけの問題ではなく、実習の目標の持ち方や学んだことの事実を客観的に記述し、何を考えたかが重要である。毎日、実習日誌を書き、学んだことを振り返ることは大きな学習効果となるので、いかに指導を展開するか教員としても課題である。指導は実習指導の授業、実習巡回指導の時、実習終了後に実習ノートを提出した時といくつかの場面はあるが、何を記録上の問題として指導をするか教員間で検討が必要である。

今回、介護実習記録上の問題と指導方針を明らかにするため、学生の記録のうち、全体的に陥りやすい問題を取りあげて検討した。授業における記録の指導方針を見直す必要性、実習の手引きの記録の項の指導の重点についての工夫の必要性が明らかになった。

記録上の問題にとどまらず、いかに実習の目標を具体化できるか、実習手引きには重要な項目が記載されているが、どこに重点を置くかが重要な論点である。このことを学生にいかに具体的に捉えさせることができるかが教育の重点であると思われる。

〈キーワード〉

実習記録 実習目標 記録指導 評価

〈はじめに〉

介護福祉実習における毎日の記録は学生にとって重要であるが、記録が書けない、まとめられない、時間がかかる、負担であるなどの声を学生から聞くことが度々ある。特に第1段階の実習にこの傾向は強いが、第2段階以降の実習でも進展が見られず、指導を必要とする学生もある。また記録が不十分なために実習施設や担当教員から指導を受け、改善が見られないと実習の単位が認められず再履修となる学生もある。記録指導は実習指導の授業の中でとりあげているが、実習で体験したこと、観察したことの事実とそれらについてどのようなことに気づき感じたか、何が学べたか考察したことを記録することが重要で

あることを指導している。記録を書くということより、実習で何を目標として学ぶか具体的な取り組みがないと「書くことがない」、「毎日同じ」ということになりかねない。実習記録は実習課題の具体性、援助する利用者とのような関わりを持ち、理解したことや感じたこと、援助の意味、利用者の反応、援助者としての自己に気づくことなど具体的な記述が要求される。したがって書くだけの問題でなく、実習のありかた、援助技術、何を学んだかの問題である。実習記録指導を実習事前と実習Ⅰ終了後の指導を充実させることによって問題の多くは改善されると思われる。

また、書けないということは、基礎教育の中で本や新聞を読むことや書く経験が少なく、情報入手は視覚、聴覚をとおして行われることが多い世代であることも否定できない。文章上の問題もあるので「文章表現」の時間を必修科目として1年次に学習できる環境を整えている。わかりやすく正確な文章、誤字、脱字がないことは当然のことであるが、この点でも指導を要する学生も多くみられる。

実習巡回指導では、何を学んだかについて実習記録から把握することが多いので、記述が不十分だと実習の目標・学習の意図にいたるまで指導を要することがある。また施設の指導者からも記録の問題点を指摘されることも多く、記録指導の工夫が必要である。

今回、記録に関して学生が持ちやすい問題の分析、適切な指導のありかたについて考察したので報告する。

1. 研究の目的と方法

対象：介護実習記録上の問題と指導方針を明らかにするため、介護専攻2年生の、主として実習Ⅰと実習Ⅱの学生の記録のうち、全体的に陥りやすい問題を取りあげたて検討した。丁寧に書かれた学生の記録、指導を要する記録を提示し、指導の方法を考察する材料とした。今回は施設における実習のみを取りあげた。

分析方法：学生の実習記録と記録に記された施設指導者のコメント、学生の実習上の問題、巡回指導時の問題等あわせて学生の記録上の特性を明らかにした。さらに実習指導の授業における記録指導の改善点と指導方針を提案する。

2. 実習記録に関する指導

1) 実習の目標と指導方針

施設実習は2年次の8—9月に実習Ⅰとして3週間、2—3月に実習Ⅱとして3週間、3年次の8—9月に実習Ⅲとして4週間で計画している。

実習各期の目標は以下の通りであるが、記録指導に重要なのは実習の目標を具体的にで

きるか、学んだ知識、技術を実習の場で活用し、援助力を磨くことができるかである。また、実習目標を自己の学習課題として具体的にすることができるかが重要である。

・実習Ⅰの目標

「利用者とのコミュニケーションを通して利用者を理解し、援助のための基本的信頼関係によって利用者が求めているニーズに関する理解力・判断力を養う」としている。

初めての实習であり、毎日実習日誌を書くことも初めてである。記録の書き方上の指導は実習の目標にそって学んだ内容と何が明確になったか、問題意識や観察したこと、今後の学習に生かせること、記録の原理・原則、プライバシー保護の視点から注意すべき事項が中心である。

・実習Ⅱの目標

「実際に利用者への介護援助の具体的実践をする。利用者の身体的・精神的レベルを理解し、安全・安楽、かつ自立への配慮をしながら実践する。」「業務記録やケース記録について内容を理解し、書き方の要点を学ぶ。」「介護と関わりのある職員とその役割について理解し、チームを組むための心構えを学ぶ」、さらに、「介護福祉士がどのような役割を担い、専門性を生かすのか」などである。

実習Ⅱでは学生も実習になれて援助の具体的実践を展開するようになる。それとともに、施設の援助方法に批判的になることもある。例えば、利用者に合わせた介護技術の応用・工夫も学生にとっては原理・原則に外れるなどと捉えることもあって記録に批判的な表現をすることがある。このような場合は施設では教員の指導のあり方に疑問を持つのは当然であろう。疑問点はあくまでも批判でなく、指導者と話し合い指導を受ける必要があることを学生に十分理解させることが大切である。

・実習Ⅲの目標

「個別の介護問題解決の方法、介護過程にそって実践」「自分自身を見つめ直す機会とする。介護の現場で、利用者や職員とかかわりながら、自分の感情の変化や気持ちが揺れ動くことを体験し、自己分析することも学習」である。

介護過程の実践は利用者の情報収集とアセスメントが鍵になる。また、施設における生活支援の基本的考え方をどこに置くかによって援助の方針が異なる。利用者の身体状況(疾患・障害)と日常生活活動が制限されていること、不自由さや「やっていること」と「できること」との差、立位や歩行、移動や移乗、施設のレクリエーション、リハビリにおける積極的行動、などについて把握する。疾患や障害だけに目を向けるのではなく、生活上の困難さや利用者のニーズの把握、潜在的ニーズの掘り起こしなど生活機能に目を向ける。

2) 実習記録について

(1) 実習目標や課題を明確にする指導

実習の第1段階ははじめての施設実習である。ボランティアや施設見学の経験はあるが

利用者が施設でどのような生活を営んでいるか、施設の機能、援助者の働きも想像する程度の段階で実習が始まる。

第1段階のねらいは、施設の特徴・機能の理解と施設で生活を営む利用者とのコミュニケーションを通して利用者を理解すること、介護援助者との人間関係を通して良い介護関係を築くための基礎的学習となる。実習で何を実施したか、実施を通して何に気づいたか、何を考えたか、次の援助に結び付けて感じたこと、考えたことを記録しなければならない。実習のスケジュールに沿って実習目標を設定し、目標に沿った活動状況を記録する。実習記録を書くことに焦点を置くと「何を書いたらいいのか」になってしまうので、目標の置き方や各場面で何を感じ・考えたか、を中心にして指導する。

実習前の授業における記録指導は限界がある。なぜ記録が必要かを理解させ、わかりやすい表現、文字、体験、行動、観察した客観的事実の記録と考察は別であることを、場面から感じたこと、学んだことを丁寧に記録する必要があることを説明するに止まっている。

そこで実習指導の授業で実習場面の事例文を読んで、1日の実習、利用者の生活場면을シミュレーションして記録を書いてみることを行ってみた。介護場面のビデオを見て記録を書き、教員による指導によって記述を確かなものにしていく作業を行っている効果的な例もある。

効果的な指導は、何と言っても実習中に巡回指導にあたる教員から学生の日々の実習日誌を通して指摘され改善指導を受けることである。学生は実習記録用紙を埋めることに終始しやすいことから、まずは実習の目標、毎日の学習計画をどのように考えているのかを重視して指導にあたらなければならない。

実習のII段階、第III段階では福祉機器の活用や介護技術を高めること、利用者の日常生活活動を高めるために介護計画立案と実践評価の介護過程をふまえて援助すること、介護福祉士としての自己の適性を考えることが要求される。記録は実習の場になれることや実習課題への取り組みが明確になるにしたがって記録上の問題も集約されてくる。

(2) 記録のしかた

記録上の基本、つまり表現法、漢字、話し言葉と書き言葉について指導を要する学生も少なくない。体験したことの中から重要な学習場面をとりだすこともなく、思いついたままの記録や感想のレベル、勉強になったなどの抽象的表現、他者に理解できない記録もある。

そこで、文章の基本を身につけるために、1年次に「文章表現法Ⅰ」（半期科目、1単位）、文章力をつけるために2年次に「文章表現法Ⅱ」（半期科目、1単位）、論理的な文章を書くために3年次に「文章表現法Ⅲ」（半期科目、1単位）を必修にしている。

当大学の文章表現法の授業担当している教員は、担当者会議を開き学年の授業内容のポイントを確認し指導方針を明らかにしている。介護福祉の実習ノートを分析し、重点的に指導を要する文章表記、語彙・表現、文・文章レベルの問題を明らかにして具体的指導を

展開している。さらに介護福祉担当の教員と打合せ会を開き、学生に具体的な文章表現の授業を行っている。

「文章表現Ⅰ」¹⁾の授業では、実習ノートにつながるように説明的な文章を書くことや話し言葉でなく「書き言葉」を身につけること、基本的な礼状を書く、正しくわかりやすい文、必要な漢字の読み書きを重点課題として指導がされている。

「文章表現法Ⅱ」では、意見や小論文の基本的な型を理解し実践する、正しくわかりやすい文を書く、実習ノートの文章を見直す、状況に応じた礼状、断り状などを書く、大学生として必要な日本語常識を重点課題としている。

「文章表現法Ⅲ」の授業の重点課題は、新聞記事などの資料を正確に理解する、テーマに関連する資料を自分で収集選択し、テーマについて深く考え、論旨が明確な小論文を書く、就職のためのエントリーシートをきちんと書く、書き上げた文章を徹底的に推敲する、さらに大学生として必要な漢字の読み書きテスト、日本語常識、表現直しにかかわるテストの実施によって自己のものと出来るように指導している。

(3) 実習記録の実際

実習施設では、学生の毎日の実習スケジュールを作成し提示してくれる。様式は施設毎であるので、学生に自己の計画表を作成させ実習日程の全体を通して目標達成が可能になるかについて検討させる。

学生の実習記録の例を以下に提示した。(個人を特定できる項目や記載に関しては削除した)

まず、学生の実習のスケジュールが施設のスケジュールに添って示される。それを基に学生の毎日の実習目標をあわせて一覧表にしてみると活用しやすい。(表1) 毎日の学習目標が具体的にできなくて悩む学生もあるが、実習スケジュールが提示されると設定しやすいが、必ずしも毎日のスケジュールの提示があると限らないので、実習の大目標に添って明日の実習目標をたてることが多い。

表2はある学生の「実習日誌」である。1日実習が終了すると記録を書いて指導者に提出して帰宅する。或いは帰宅後記録して次の朝、指導者に提出することになっている。

表2は実習Ⅰ段階の第1日目記録である。この学生は、日々の実習課題が明確であり体験した内容の事実を率直に表現していて無駄がない。施設においても学生の実習目標を理解し、十分に体験できるように指導者の配慮がされ、その時々学生の希望にそった指導を展開している。学生とのミーティングも頻繁に行い、疑問に応え、利用者を理解しやすいように情報を与えてくれる。巡回指導の教員にも情報がきちんと伝わり、学生指導のための連携がとりやすい。

実習初日のため何も解らず、緊張の中にも実習目標に添って努力しようとする姿が伺え

1) 17年度 文章表現法担当者会議資料 田園調布学園大学 短期大学部 2005年4月

表 1. 施設実習における毎日の学習目標と施設のスケジュール (実習 I)

実習日	目標	今日の実習目標(学生がたてた目標)	実習生の予定(施設で計画)
第 1 日 ○月○日	1 週目	施設の概要・機能を把握する笑顔で挨拶, 利用者とのコミュニケーション	施設案内とオリエンテーション, フロアで利用者との対応
第 2 日 ○月○日	施設の機能を理解	名前と顔が一致するように, その人の特徴をみつけて覚える	フロアで利用者との対応 食事介助
第 3 日 ○月○日	利用者とのコミュニケーション	名前と顔が一致させるように, お茶, 昼食の配膳を行う。できる業務を手伝う	フロアで利用者との対応 食事介助 音楽療法
第 4 日 ○月○日		1 人の利用者といっしょに話せるように相手のことを聞き, 自分のことを話す	レクリエーション
第 5 日 ○月○日		居室の利用者とのコミュニケーションをとる。	書道サークル
第 6 日 ○月○日	2 週目	排泄介助を見学し, 経験させてもらう	排泄介助(オムツ交換) デイサービスに参加
第 7 日 ○月○日	介護援助を通して	オムツ交換の見学, 技術を学ぶ	排泄介助(オムツ交換) 音楽療法
第 8 日 ○月○日	利用者とのコミュニケーション	食事の雰囲気づくりや声かけの工夫をする	ベッドから車椅子への移乗(見学), トイレ誘導(見学)
第 9 日 ○月○日	コミュニケーション	コミュニケーションによって言語障害のある利用者を理解する	ベッドから車椅子への移乗
第 10 日 ○月○日		非言語的手段に注目したコミュニケーションの実施	レクリエーション(ゲーム)
第 11 日 ○月○日	3 週目	ジェスチャーや相手の視線に注目する	トイレ誘導(見学) 書道サークル見学
第 12 日 ○月○日	様々な利用者の理解と実習目標の確認	利用者の表情から何を求めているか理解する。オムツ交換やトイレ誘導の体験	トイレ誘導 喫茶の介助
第 13 日 ○月○日		デイケアサービスを見学し, 理解する	トイレ誘導 デイサービス
第 14 日 ○月○日		食事会に参加し, 食事環境や雰囲気を体験する	トイレ誘導 食事会参加
第 15 日 ○月○日		入浴介助におけるプライバシーの配慮について学ぶ	トイレ誘導 入浴介助(見学) 食事会参加

土曜日は帰校日として記録指導, 実習上の問題の指導, 学生同士の情報交換を行う

表2. 実習 I における第 1 日目の記録

実習日誌

(表)

実習部署	○ ○ ○ ○	学生氏名	○ ○ ○ ○
実習担当者	○ ○ ○ ○	実習日	○ 年 ○ 月 ○ 日
今日の目標	笑顔で挨拶し、利用者とコミュニケーションを図る		
時間	実習事項	内容 (利用者の状況, 援助状況)	考察 (気づき, 感じたこと学んだことを具体的に)
9:00	申し送り		
9:30	コミュニケーション	Aさん(女性)の水分補給を行う。嚥下困難のため飲むペースに気をつける。間隔をあけると怒り出す。(声を上げる) Bさん(男性)と話す。話の最中に「寝たい」と言っていたが、「お昼だから我慢して」と言い話を続けたが眠ってしまった。	声をあげるのはAさんの意思表示だと指導者よりアドバイスを受ける一人ひとり表現のしかたが違うので、個人の特徴を知る必要がある。 どうして眠いのか理由を聞いて指導者に報告し、居室に誘導する方がよかったかも知れない。
12:00	食事介助	Aさんの食事介助を行う。咀嚼力はあるが歯がないことと嚥下困難なため極小きざみ食。飲み込んでいなくても口を開けるので、ちゃんと飲み込んだか調べてから介助しないとむせるので注意する。	視力が低下しているため、食材が何であるか言ってあげることが食事を楽しくできる方法だと指導者からアドバイスを受ける。 <u>声かけを忘れて食べてもらうことに専念しすぎないようにする。</u> 指導：援助場面の基本事項の確認
13:00	休憩	レクリエーション	
14:00	わらべ歌	Cさん(女性)と手拍子をしながら歌を聞いた。途中で居室に帰ると言い出し居室に戻った。	居室がどこだか分からなくて帰るまで時間がかかった。顔と名前を一致させ、居室を早く覚えたい。
15:00	コミュニケーション(おやつ)	Dさん(女性)と話しながらおやつを介助を行う。一人でほほできるが、こぼしてしまう。出身地の話をしてくださった。	出身地の情報を知らないで、少し調べて明日とかまた話をしたい。 <u>共通の話ができるといい。</u> 以降に 指導：具体的計画は？
16:30	記録終了		

る。指導者のコメントも、励ましと暖かい指導があって安定した実習が開始されている。

この学生が実習の事前オリエンテーションを受けて感想として記録していたことは、自己の実習目標が援助の対象である利用者あつての目標でなかったことを反省していた。対人援助としての目標を念頭において、何が把握できるかを考えたいとしている。利用者のプライバシーを守ること、どのような対応がその人にとって良好なことなのか、相手の立場に立って考えられなければ質のよい介護は提供できないことを忘れないようにしたいという。また、実習施設は利用者が住みやすく行動力を起こせる心配りがされていることなどが記載され、自己の実習課題を達成していこうとする心の準備がされていた。

実習日誌
一場面をふりかえってー

(表2の裏)

利用者の状況, 言動	どう感じたか	どう対処したか	その結果どう考えたか
<p>2F フロアホールでEさん(女性)と話していると隣のテーブルにFさん(男性)がきた。そしたらEさんはFさんを別のテーブルに移して欲しいと怒りだした。</p> <p>指導：その時の態度・表情などの観察</p>	<p>どうしてEさんはFさんを嫌うのかが分からなかったから理由を聞こうと思った。</p> <p>指導：何のために聞こうと思ったのか 思うのですかと訂正</p>	<p>「なんでFさんを違うテーブルに移してほしいと思うんですか」と尋ねた。理由は「嫌いだからだ」とだけ言われた。その様子を見ていたワーカーさんがEさんをなだめた。</p>	<p>このような場合どうしているか分からずただおどおどしてしまうだけだった。どうしたらEさんが納得いくか解っていたけれど違う解決策を考えられるようにしたい。</p> <p>指導：例えばどのようなことか、具体的に考える</p>
一日をふり返って			
<p>今日は初日で何をどうしたらよいのか全く分からなかった。目標の笑顔で挨拶も出来ずに終わってしまった。一人一人の人と話すことが出来るいいと思う。今のままじゃ出来ない。もっともっと積極的に自分から元よく話かけることをしたい。</p> <p>食事介助も水分補給も相手をよく観察しないと苦しい思いをさせてしまう。むせてしまった時の対処の方法やむせさせないように注意することができるようにしたい。</p> <p>利用者の名前と顔を一致させられるようにできるだけ話しをしたりする。名前と顔を一致させられるようにして、一人一人の特徴をつかんでいけるようにして、援助ができるようになりたいと思った。</p> <p>指導：どのような観察が必要か</p>			
<p>指導者助言</p> <p>実習初日という事で緊張されていたと思いますが、お年寄りと話していくうちに気持ちも少しずつ和んだのではないのでしょうか。コミュニケーションが信頼関係作りの第一歩だと思います。焦らず、利用者さんの声に耳を傾けてくださいね。一日のふり返りにもあるように一人一人個性があるので、その方にとってよりよい介護が出来るようにがんばって下さい。一日お疲れさまでした。</p> <p style="text-align: right;">指導者サイン</p>			

3週間の実習が終了して「実習のまとめ・考察」は表3の通りに記録されていた。

1日の実習で、印象に残った1場面をふり返って何を考えたか考察することが重要であるが、実習での経験を積み重ねることによって考察の仕方に変化があらわれる。

同じ学生の援助場面の考察を表4に示した。

実習記録で指導が必要となる学生の記録を表5に提示した。このような例は多々あり、実習Iの終了段階で個別に指導が必要な対象である。記録の書き方だけでなく、援助場面で利用者の何を観察・理解し、指導者から何を学ぶのかを明確にして実習IIに繋げていけるように動機づけをする。実習Iで十分な指導がされればその後の記録指導は必要がなくなると思われる。この指導は現在、個別に行っているが、全学生に共通のことであり実習指導の授業の中に取り入れることが望ましい。

記録上陥りやすい問題として、感想レベルのものや観察も自己レベルの推測で聞いてみ

表3. 実習のまとめと考察

実習のまとめ・考察

実習部署	○ ○ ○ ○	学生氏名	○ ○ ○ ○
実習担当者	○ ○ ○ ○	実習日	平成 ○ ○ 年 ○ 月 ○ 日
利用者の生活の場、関わりから感じたこと・学んだこと			
<p>この方は痴呆だからとか、麻痺があるからなどとその人の一面だけを見るのでは利用者にとって必要なことや大切なことは何一つ見ることは出来ないと思った。指導者のアドバイスから、援助をするにしてもコミュニケーションをとるにしても先入観から見てはいけない大切さを知った。</p> <p>利用者の一人一人は、私の知らない世界を生きてきて、様々な経験をしている。その人が生きてきた時代背景、その時代の歌も全然知らない。その人を理解するにはこういう知識も持っていなければ援助できないと実感した。</p> <p>相手を知ることによってそこから何かを生み出せたら（信頼関係や利用者が求めること等）単なるコミュニケーションで終わらず次の援助につながると思った。</p> <p>何かをすることだけが援助でなく、遠くから見守る援助もあることを念頭に入れて関わることを忘れずにいたい。</p> <p>指導： 誠実に相手を知ろうとすると、多くの課題にぶつかる。何でも知っていなければ援助できないと考えるよりその時、その場で利用者から教えていただく、あるいは一緒に楽しむ中から学ぶ態度が重要。</p>			
自分自身の実習課題、目標の達成度			
<p>自分の実習目標に添った実習ではあったが、実習をしている中で、日々課題や目標が生まれた（例えば食事はただ全量摂取してもらえればいいのかではなく、環境や食事の雰囲気などに目を向けどういうことが良いのか、悪いのかを考える。麻痺や高齢による言語障害のある利用者とのコミュニケーションはどのように工夫するか等。）そういうことも含めて考えると、自分では実習課題・目標はほぼ達成できたと思う。利用者の観察は、食事介助をやらせていただいた利用者を毎日観察する程度で、他の方の観察はそれほどできなかった。たった3週間だけなので、全部が全部できるわけではないがもう少し観察の目が養えるといいと思った。今後の実習では、利用者とのコミュニケーションを通して状態の観察など出来るようにしたい。</p>			
実習の場で自分を生かせましたか 介護職への適性についてどう感じましたか			
<p>私は人と話すことが好きだ。だから、最初、コミュニケーションはとれるのでは？などと甘く考えていた。実際は実習初日から3日間ぐらい、何をどうしていいか戸惑うばかりで、利用者の特徴や性格、状態も全く分からず、指導者からも情報を得ようとせずになんか何となく過ごしてしまった。積極性が足りないと思った。コミュニケーションとはただ話すことではないと気づいてから、私は少し変わったと思う。最初は話せる方ばかりコミュニケーションを取ろうとしていたことを恥ずかしく思う。</p> <p>(中略)</p> <p>実習で嬉しいことも楽しいことも、困ることもあった。だけど自分で直面したことを考え、感じ、アドバイスをもらうことで今まで私の中にあつた介護のありかたとは違う介護を学べた。</p> <p>指導：どのようなことか、具体的な表現が必要</p>			

表4. 場面をふりかえって考察 (実習日誌から)

実習日誌
一場面をふりかえって

利用者の状況, 言動	どう感じたか	どう対処したか	その結果どう考えたか
Sさんとのコミュニケーションの中で、言っていることが聞きとれなくてそのたびに目の動きや表情、仕草などに目を向けたが私には理解できないことがあった。 指導：観察方法の工夫がされている	Sさんが私に対して何か伝えようとしているのにそれを受けとることが出来なければ意味がないし、またSさんが人に何かを伝えようとする気持ちが薄れてしまうと嫌だからどうにか理解できる工夫(方法)を考えようと思った。	最初はどうすればいいか悩んでいたが、ホワイトボードを見て、前にSさんが見せてくれたノートの字を思い出した。職員が以前Sさんは筆談が出来ると言ったのを思い出し、分からない時はホワイトボードに書いてもらうことにした。	ホワイトボードに書くのは少し大変そうだったがSさんの伝えたいことが私に伝わり、Sさんの笑顔が見られた。でも、できれば筆談でなく理解できるようになったほうがいいような気がする。 指導：様々な方法を考えてみる
1日をふり返って			
<p>今までSさんと話したりかかわったりする中で知った得意なこと(好きなこと)と一緒に出来ればいいと思い、あやとりを持っていった。「以前、あやとりが好きだ」と言っていた時は、ヒモがなく教えてもらえなかったが、今日は教えてもらえたので一緒に楽しめてよかった。</p> <p>今日は私の家族の写真や、私が習い事で作った作品などを持って行き、私のことを知ってもらう努力をした。私は、相手を知るためには、まず私のことを知ってもらうことが大切ではないだろうかと考えたからだ。</p> <p>今までほんの少ししか関わっていなかったので、Sさんは私について全然知っていることはなかったのだからいい機会だった。しかし、私が家族の話をしたらSさんは亡くなったお母さんのことを思い出し、悲しそうな表情と思い出話をしてくれた。もしかしたら思い出したくない記憶を思い出させてしまったのかもしれない。</p>			
<p>指導者助言</p> <p>介護の仕事は信頼関係がとても大切です。あなたがSさんを知り、自分のことを知ってもらおうと努力されたことでSさんはあなたを信頼し、色々なことを話したり、表現してくれたのだと思います。お年寄りの中には何か希望や不安な事があってもなかなか言われぬ方もいるので、職員側が言いやすい配慮をあげる事が大切です。介護計画は、様々な情報を集めた上で生活上、健康上の問題点をあげ、今解決すべき事を計画します。Sさんにとって何が必要か考えて、これからの介護に生かしてください。</p> <p style="text-align: right;">指導者サイン</p>			

たり、指導者の判断を仰ぐこともしていない。例えば、「嫌そうだった」、「痛そうだった」などである。また、「難しかった」、「危険だった」などもどのような状態で、何を注意すべきかを記載していない。利用者の立場に立ってどのようにしたらいいか考えられるように指導しなければならない。

3. 実習巡回における指導

実習中の指導は、少数の教員が多くの施設を分担して巡回するので指導上困難な点が多々ある。

一施設で実習を受け持ってもらえる学生は1~2名であるため多くの施設に依頼しなければならない。施設も広範な地域に分散しているので、巡回の交通時間がかかる。

表 5. 毎日の実習日誌（実習 1）

実習日誌

時間	実習事項	内容（利用者の状況、援助状況）	考察（気づき、感じたこと学んだことを具体的に）
(略)			
13:15	リハビリ	利用者 にリハビリを行う 指導：見学か、一部介助か	利用者 にリハビリを行うと痛そうな様子なので、リハビリを行うのに抵抗を感じた。 指導：痛そうという観察は推測レベル 抵抗を感じたのはだれか 専門職としてリハビリの意義や利用者への援助の必要性について考えること
14:15	離床援助	体操のため利用者をお連れする (利用者を車椅子へ移乗)	車椅子の移乗は昨日よりうまくできたが、 まだだった。 指導：まだとはどういう状態か。利用者の様子を観察すること
14:30	休体操	リズム体操、ラジオ体操を行う	利用者は楽しくないのかなと思った 指導：なぜそのように感じたか、利用者の状態観察。聞いてみること。楽しくする工夫を考える
16:00	排泄介助	排泄介助・オムツ交換の一部介助	利用者がとても恥ずかしがって、いやそうだった。 指導：誰でもいやですね。恥ずかしく感じない介護の方法はどうしたらいいか考えること
(略)			

学生の面接によって実習における援助場面を中断させることがあること、忙しい施設指導者から学生の状況を伺うために迷惑をかけてしまうこともある。記録も提出中の場合は見ることができず、問題が把握されにくい。時には記録のコピーを依頼して指導をすることもある。

記録に関しては、適切に記録がされているか、提出状況が規定通りにされているかについて確認する。また、落ち着いて実習が展開されているか、実習課題が順調に進められているかも確認する。

実際の介護場面は利用者のプライバシー保護の立場、教員が現場に入り込むことの迷惑感から遠慮しなければならないこともある。教員は学生と面接室で話し合いながら実習目標に沿った学習が展開されているか判断している。

4. 実習上の問題と記録

1) 利用者の理解

援助にあたって利用者の名前と顔を早い時期に一致させることが必要と学生の記録には多く書かれている。名前を覚えるには努力が必要であるが、利用者との接近しようとする気持ちが現れている。利用者や施設指導者に支えられて実習終了時にはかなり満足な状態に変化している。

学生の記録には、例え認知症であっても言葉のコミュニケーションが難しくても、一人の人間として尊重することから理解につながることを実感して記されている。

現場の実習では技術を磨くことに終始して、技術経験ができたことや上達したことに満足することが多い。「利用者にとって満足なものか」がおろそかになりやすいが、利用者の観察・理解にむけて指導を要する重要な視点である。

2) 記録のありかた

実習記録に関して教員が問題とすることは「介護実習のあり方と評価」²⁾で報告し、指導を必要とする問題を指摘した。

問題点として

- ・記録を書くのが難しく、時間がかかる。
- ・はじめての実習に対する準備、学習が不足している。何を課題にしているのか具体性に欠ける。表現力が乏しい。
- ・記録の誤字、脱字が多い。話し言葉の表現を注意。専門用語が使えない。
- ・実践の事実を書くだけで、考察ができない。
- ・事実の記述はできているが、自分の考えが表現されてない。
- ・記録は感想のレベルで、深まりがない。
- ・多く記録されていたが、整理してポイントをはっきりさせる工夫が必要。
- ・1日の援助目標を振り返り、結果の分析をすることができてない。
- ・経験したことの意味、理由を考えることはできたが、表面的であった。
- ・記録に時間がかかり苦勞している。状況の羅列で整理ができない。
- ・毎日のケアに取り組むのが精一杯で深く考えることができない。記録に残せない。

評価される点は

- ・反省会でも自分の言葉で表現し、考察している。記録もしっかり書けている。
- ・よくメモをとり、内容を確認して記録している。
- ・感じたことを素直に表現している。少しずつ学んだことを身につけている。

2) 柴原君江他「介護実習のあり方と評価」人間福祉研究 第7号 田園調布学園大学 平成17年3月

このうち、誤字、脱字、表現方法は具体的な話題になるが、「考察ができない」、「深まりがない」、「援助の意味が考えられない」、「利用者の観察」などに関しては問題が多様で、個別指導にゆだねざるを得ない現状である。

3) 記録指導の工夫

(1) 記録に関する事前指導の問題

実習の実習指導にあたって記録の指導を強化する必要があるのは言うまでもない。実習手引きには書き方の注意事項と実習記録記載例が示されているが、事前の指導は決して十分と言えない。また、学生も「実習の手引き」を熟読していないものが多い。

今回、実習指導に授業の中で実習の具体的事例を提示し、施設の利用者と向き合って介護実習を展開している場面をイメージ化しながら記録を書く訓練を授業で取上げて実施した。ボランティアやアルバイトの経験があつて施設をある程度知っている学生はイメージ化が容易であったが、事例を読んだの記録を書く作業はかなり困難をきわめた。時間のゆとりをもって個別に指導しないと十分ではない事が解ったが、事前指導は前項で問題となった具体的事項を整理して、学生に提示すべきと考える。

(2) 実習終了後の指導

実習終了後の指導では、何が学べたかをテーマごとに設定して、小グループで討議、まとめ、発表をしている。記録に関しては個別指導を行い、授業の中では取り上げていないが、全学生に関わる問題に関しては取り上げる必要がある。そのためには実習の場における学習と、授業で学んだ理念とつなげて考えられるような指導が必要である。

5. 考察とまとめ

1) 考察

(1) 授業における記録の指導方針を見直す必要性

実習指導の授業では以下の項目をとりあげている。

実習の意義と目的、実習記録の方法、実習ノートの記録のしかたと当大学の学生が使用する記録用紙の説明である。ここで強調すべきことは実習に生かす記録である。

それは、指導者から学んだこと、体験した事実だけでなく感じたことを記録することによって利用者を深く理解し、援助方法を考えることに繋げていくことである。前述した学生の記録を指導教員が丁寧にみて指導を行えば、いま問題になっていることは次回の実習では改善されると思われる。

実習終了後の授業では、実習で学んだことを振り返りテーマを設定してグループで話し合う。そのまとめを発表しているが、実習記録に関してはほとんど話題にならない。次の実習計画においても記録を見直す作業がされてない。

教員の間でも記録が書けないことを問題にしてはいるが、具体的にどのような指導をす

べきかについては教員毎に個別指導をしているため共通にされていない。実習指導の授業で、利用者の生活場面を想定し、援助計画をたてる、記録を書いてみることも1つの方法である。

(2) 実習の手引きに記載されている「実習記録」の項の重点

実習手引きには記録項目が記載されているが、どこに重点を置くかが重要な論点である。特に、「記録によって実習内容を明確にし、それを評価・修正し、行動の計画性を養うことや記録を書くことによって実習内容を意識し、自分自身の傾向を知る、自己覚知に繋げていく」ことを自覚させることが重要で、このことを学生にいかに関局的に捉えさせる教育が行えるか、検討が必要である。

実習ノートの書き方、注意事項については必ず踏まえなければならないルールであるから、記録を書きながら学生に再度チェックさせなければならない。

2) まとめ

実習ノートの指導上の視点

- ① 実習の課題の持ち方、実習場面での行動の問題。
- ② 記録指導は実習Ⅰにおいて重点的に行うことによって次の実習に繋げる。
- ③ 体験したことしたこと、指導を受けた事実の記録の記載。
- ④ 実習場面から感じたこと、考えたことの記載。
- ⑤ さらに目標に沿って最も印象に残り、学ぶことができた1場面をふり返って考察が出来ること。
- ⑥ 1日の流れに沿って記録することは便宜上実施していることなので、各場面で何を学んだかが記録されること。
- ⑦ 援助技術・サービスが利用者にとってどうであったか、生活機能への視点における情報収集。
- ⑧ 記録を見る側が理解できる内容表現。
- ⑨ 書き方・表現上の問題がある場合の指導。

参考文献

- 1) 一番ヶ瀬康子監修 「介護実習指導」 KENPAKUSHA 2004.9
- 2) 澤田信子「介護実習の意義と課題」介護福祉 NO.46 2002夏季号(財)社会福祉振興・試験センター
- 3) 松室登志子「介護実習施設の現状と課題」介護福祉 NO.46 2002夏季号(財)社会福祉振興・試験センター
- 4) 柴原君江、佐藤芳子他「介護福祉実習のあり方と評価」人間福祉研究第7号 田園調布学園大学 2004年度
- 5) 田園調布学園大学 人間福祉学部 介護福祉実習「実習の手引き」2003年